

平成24年度 学校評価自己評価書

愛知教育大学附属岡崎小学校

1 総括

(1) 教育目標

- ①生活のなかから問題を見つけ、自ら生活を切り拓いていくことのできる児童の育成。
→「生きる力」の育成（生活教育の発展と充実）
- ②経験や体験を重視し、事実をもとに問題の解決を図ろうとする児童の育成。
→問題解決能力の育成
- ③友だちの気持ちを思いやり、互いに磨き合おうとする児童の育成。
→共感的な人間関係の形成

(2) 中長期経営目標

- ・自由で自立した人格の育成と社会的責任の自覚を養う。
- ・児童の多様な能力に対応した教育を行うとともに、個性を尊重しつつ学力の向上を図る。
- ・大学と連携し、子ども一人一人の個性と生活体験を大切にした「生活教育」についての教育研究を行う。
- ・安全で安心な教育環境を整備し、安全・健康教育を進める。
- ・国立大学法人附属学校として、大学と連携した学校マネジメントを推進する。
- ・機能的な学校運営を行うとともに、教職員の職能向上に努める。
- ・国際交流の充実に向けた学校づくりを進める。
- ・学校の様子や状況について、家庭や地域に積極的に情報提供し、学校評価を学校運営に生かす。

(3) 短期経営目標（本年度の重点目標）

①学習指導

- ・基礎的・基本的な知識及び技能の習得を図る。
- ・やる気と自覚、共感能力を大切にし、解決したい問題に対する問題解決力を育成する。

②研究

- ・問題解決的な学習を展開するなかで、他者を思いやり、ねばり強く創造的、協同的に取り組む子どもの姿をめざす。特に、協同的に学ぶ子どもを支える教師の営みのあり方を探る。
- ・大学と連携し、通常学級における特別支援教育や教育相談の体制整備を図り、支援のあり方を探る。

③教育実習

- ・教育実習生に対し、教育活動の基本的なあり方を具体的な実践を通して指導する。

④学校運営

- ・学校評価をもとにした改善点を点検しながら、よりよい学校運営をめざす。
- ・行事の精選・スリム化を図り、授業時間を確保する。
- ・時間外勤務の縮小及び業務の精選・効率化をより進め、教職員の健康維持を図るとともに、タイムマネジメントの意識を高める。

2 自己評価の実施体制

学校が経営目標を立て、具体的な実践を行い、その結果を次年度の学校経営方針に反映し、教育活動を改善するというPDCAサイクルに基づく学校評価を実施する。この学校評価を継続的に改善していくためには、目標を適切に改善していくことが必要である。そのために、本校では学校全体の教育目標とともに、めざすべき成果やそれに向けた取り組みに関する中長期と単年度の目標を具体的に設定している。

本年度実施した評価項目については、短期経営目標（本年度の重点目標）をさらに具体化して設定したものである。また、昨年度の評価項目を継承し、継続的に評価することで、教育活動のさらなる見直しを図ろうと考えた。また、協同的に問題解決に取り組む子どもの姿をめざした研究の成果を探るとともに、子どもたちの良好な人間関係をとらえるために新たに評価項目を設定した。さらに、自校給食を通じた食育の充実を図るためにも、新たな評価項目を設定し、改善策を探っていくことができるように心がけた。

アンケート調査の実施（実施時期 7月6日（金）～13日（金））については、①保護者 ②児童 ③教師を対象に行った。設問は20問とし、個人情報保護の観点から匿名性の担保に配慮した。

3 評価結果（「よくあてはまる」、「ややあてはまる」の合計の割合で判断した）

| | |
|--------------|---------------|
| 100%～80%・・・A | 80%～70%以上・・・B |
| 70%～50%・・・C | 50%未満・・・D |

「よくあてはまる」、「ややあてはまる」の合計の割合で判断した理由は、以下の3点である。

- ①「よくあてはまる」「ややあてはまる」「あまりできていない」「できていない」のいずれかを選択する形で行っている。教育活動において、「よくあてはまる」「ややあてはまる」の割合の多いことは、教育活動が円滑に行われていることを示すと考える。また、「あまりできていない」「できていない」の割合が多い評価内容の原因を分析し、緊急性や重要度を吟味したうえで、教育活動に反映させたいと考える。
- ②昨年度との傾向の違いを比較をするためにも、この方法をとる。
- ③評価対象となっている「保護者」「児童」「教師」の意識の違いからも、教育活動に対する意識や方法のあり方を探ることができると考える。

4 考察

（1）全体評価

設問1「附属小学校は、誇れる学校である」は、毎回のアンケートで高い数値を示して

いる。特に保護者，児童が自分の学校に誇りを持っていることは，本校の進める教育活動に理解を示す保護者，学校生活が充実している児童を数値として表している。また，設問2「附属小学校は，子どもの自主性や主体性を育む教育を実践している」においても同様の評価であり，本校で進めている，授業のなかで子どもたちが楽しみながら主体的に問題を解決できる力を身につける授業づくりの成果であると考え。ただ，設問4「授業づくりの工夫」は，子どもの主体的な学びをめざした授業づくりについて，保護者や児童の割合が高いものの，教師の割合がBとなっている。これは，教師自身が常に目の前で展開される授業に満足することなく，向上心をもって取り組もうと考えているのではないかと考察する。また，設問9「ねばり強く工夫しながら解決する力が育っている」に対して，教師の割合が昨年度より下がっているのは，仲間とのかかわりを重要視するものの，個の力をさらに高めていきたいという教師の願いから来るものではないかと考えられる。

教育目標に則し，教師が個の力を高めよと昨年度の20項目の設問に対しての評価で，3者ともにA評価が多く見られることから，本校の教育方針，教育活動を自信をもって教師は進めており，保護者にもおおむね理解されていると考える。

本年度新たに設定した評価項目，及び昨年度改善項目，目標値を設定した項目等については，次のような結果であった。

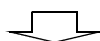
<本年度新たに設定した項目の評価結果>

①**良好な人間関係づくり**の視点では，これからの社会にとってコミュニケーション能力や仲間を認め，仲間と共に新たなものを生み出す力が必要とされる。4年間の研究もそこに視点を当てて取り組んできた。また，教育課程の見直しにより，子どもたちに寄り添う時間も確保してきた。こうした取り組みが，子どもにとって有効であったか探っていくためにも，評価項目として設定し，**これまでの取り組みを振り返り，今後の改善に生かしていく。**

教師…「常に学級の子どもたちの様子に目を向け，子ども同士のつながりの把握に努めている」

保護者…「教師は，授業や行事において，人とのかかわりを大切にして，子どもの指導に当たっている」

児童…「友だちの気持ちを考えて行動したり，発言しようとしている」



| 良好な人間関係 | |
|---------|--|
| 設問項目 | 設問 3 良好な人間関係づくり 教師： 今年度 A 83.3% 保護者： 今年度 A 93.8% 児童： 今年度 A 85.9% |

どれもA評価であることから、子どもたちの人間関係において、おおむね良好であることが言える。また、仲間とのかかわりを重視した本校の指導に対する保護者の理解も高い。学習においても、仲間と学ぶよさを実感している、教師、保護者、児童の3者の姿が見えてくる。**今後も他者とのかかわりを通して、学びを深め、高める子どもや、よりよい人間関係を築いていく子どもの姿を具現化していく方策を探っていく。また、児童の14%近くは、友だちの気持ちを考えて行動したり、発言しようとしているを「あまりあてはまらない」「まったくあてはまらない」の評価をしており、今後はこのような児童への支援を具体化していく必要がある。**

②「食育と自校給食」の視点では、本校の自校給食利点を生かし、食（作り手）に対する感謝（人間的成長）や食を通じた健康管理について、**教育活動の場として、今後の方策を探るためにも、評価項目として設定した。**

教師…「自校給食のおかげで、食事を作ってくれる人への感謝の気持ちが育ってきている」

保護者…「附属小学校での自校給食のおかげで、食事を作ってくれる人への感謝の気持ちが育っている」

児童…「作ってくれる人への感謝の気持ちをもって、おいしく給食を食べている」



| 食育と自校給食 | |
|------------------|--|
| 設 問 項 目 | 設問 12 食（作り手）に対する感謝（人間的成長） 教師： 今年度 C 66.7% 保護者： 今年度 B 84.1% 児童： 今年度 A 94.6% |

保護者、児童は、高い評価となっている。特に、児童は、栄養士さんや調理員さんへの感謝の気持ちが強い。生活場面でも、子どもたちが、栄養士さんや調理員さんに気持ちのよいあいさつができています。**一方、そうした姿を目にしている教師だが、評価は「C」となっている。これは、自分たちの健康も意識しながら食に対する感謝を育みたいという教師の願いからくるものではないだろうか。「食育」という視点で、教育活動の場として、自校給食の利点を具体的な方策として講じていきたい。**

<昨年度の改善対策と今年度の結果>

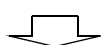
【昨年度の課題とその対策】

- I スクールカウンセラーやアイリスパートナーの運用の充実
- II 基礎的な知識や技能の習得とコンピュータの活用についての取り組み
- III 基本的な生活習慣の定着

I スクールカウンセラーやアイリスパートナーの運用の充実

【昨年度の改善策】

- ①通信や掲示を活用し、アイリスパートナーの活動を全校に周知する。
- ②アイリスパートナーについては、これまでの取り組みを生かし、ソーシャルスキルトレーニングなど、子どもたちへのはたらきかけのあり方を探りたい。
- ③担任とスクールカウンセラー、アイリスパートナーとの連携を充実させるにあたり、報告用紙の活用や情報の電子化（セキュリティの保証を含め）による共有、相談室の環境整備などを進め、効果的な運用を図る。
- ④特別支援教育推進委員会を中心に、大学の関係機関や地域の診療・相談機関とも連携を模索し、より効果的な運用を協議・実践する。



【本年度の取り組みと成果】

| スクールカウンセラーやアイリスパートナーの運用の充実 | |
|----------------------------|---|
| 設 問 項 目 | 設問 6 スクールカウンセラーやアイリスパートナーを活用し、より深く子どものことをとらえ、成長に役立てようとしている。 教師 昨年度 B 72.7% → 目標値 A 85% → 本年度 B 70.8% 保護者 昨年度 B 81.9% → 本年度 A 84.5% 児童 昨年度 C 68.6% → 目標値 B 75% → 本年度 C 53.1% |

教師、児童ともに、目標値にはならなかった。

現在6名のアイリスパートナーが、ほぼ週に1回ずつ来校している。ただ、アンケートをとった1学期には、アイリスパートナー4名が、金曜日に活動を行っていたので、子どもたちにとって、常時アイリスパートナーがいる意識が低かった。また、1学期は、ほぼ、同じ学級に入っていたので、かかわりのない学級も生まれてしまった。そのような現状が結果として出ている。

また、昨年度からの改善点への取り組みから分析していく。

・改善策①について

昨年度行った「アイリス通信」などの活用によって広報活動が十分行えなかった。かかわった学級にとっては、近い存在であったアイリスパートナーであるが、かかわりのない学級の子どものための周知ができていなかった。今後、**認知度を上げるためにも昨年度同様に「アイリス通信」発行を進めていく。**ただ、保護者の数値が昨年を上回っているのは、アイリスパートナーの存在が保護者にとって定着していると考えられることができる。

・改善策②について

2学期現在の取り組みはできていない。現時点では、アイリスパートナーが、ソーシャルスキルトレーニングなど、高学年を中心に計画中である。

・改善策③について

昨年度の課題を受け、本年度もっとも重点的に取り組んでいる。具体的には、担任とスクールカウンセラーやアイリスパートナーとの情報交換の場を授業後もつようにしている。また、特別支援教育コーディネーターがスクールカウンセラーやアイリスパートナーと、教育相談後や活動後に情報交換の場を設定し、学年主任とのパイプ役となっている。

アイリスパートナーについては、本年度は、4月当初の学年との話し合いにより、学期ごとの学級付きとして、じっくり取り組めるようにしている。長いスタンスで、アイリスパートナーが、子どもの変容を追えるようにした。

スクールカウンセラーについては、保護者との相談活動を中心に行っている。地道な活動が続いており、現在8家庭の相談を受けている。今後も申し出に応じて相談活動を進めていきたいと考える。

学級において心配な児童や希望のあった保護者への対応は効果的であるが、学級集団のなかで問題を抱える児童が自分から相談活動に掛かりやすい環境づくりやスクールカウンセラーについてまだ認識のない保護者への周知を、具体的な方策として検討したい。

・改善策④について

本年度、大学との連携強化のため、アイリスパートナーの日々の取り組みを、大学の授業においても検証していただき、その後の取り組みに生かしていくようにした。また、9月に、担当教授祖父江先生が来校され、1学期の取り組みの総括を行った。今後も**連携を深め**、効果的な運用を模索していく。

II 基礎的な知識や技能の習得と情報教育の取り組み改善

【昨年度の改善策】

- ①あおいタイムの充実及び、授業でも基礎的な知識・技能の習得を図る時間を確保し成果を児童自身が確認できる機会を設ける。
- ②全国学力状況調査の結果を保護者会などで伝える。
- ③自分の必要な情報を効率的に得たり、共有したり、発信したりする情報教育のあり方を教師が共通理解し、日々の学習指導と関連させながら指導する。
- ④授業参観等でコンピュータを活用する授業をしていし、公開する。



【本年度の取り組みと成果】

| | | | |
|------------------|----|--|--|
| 基礎的な知識や技能の習得 | | | |
| 設 問 項 目 | 設問 | 8 基礎的な知識・技能の定着を図っている。 教師： 昨年度 C 63.6% → 目標値 A 80% → 本年度 A 87.5% 保護者： 昨年度 C 67.9% → 目標値 A 80% → 本年度 C 67.7% 児童： 昨年度 A 92.5% → → 本年度 A 95.3% | |
| 情報教育の取り組み改善 | | | |

| 設 問 項 目 | 設問 11 コンピュータを使っての学習の充実 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|--|--|--------------|--------------|--------------|--------|--------------|--------------|--------------|--------------|--------------|--------------|--------------|--------------|--------------|--------------|--------------|--------------|--------------|--------------|--------------|--------------|--------------|--------------|--------------|--------------|--------------|--------------|--------------|--------------|
| | 教師： 昨年度 D 27.3% → 目標値 C 50% → 本年度 D 33.3% | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| | 保護者： 昨年度 C 67.2% → 目標値 B 75% → 本年度 B 71.1% | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| | 児童： 【昨年度】 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| | <table border="1"> <thead> <tr> <th></th> <th>人</th> <th>本・図書室</th> <th>コンピュータ</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>1年</td> <td>64.0%</td> <td>77.5%</td> <td>34.2%</td> </tr> <tr> <td>2年</td> <td>63.5%</td> <td>54.8%</td> <td>12.5%</td> </tr> <tr> <td>3年</td> <td>70.3%</td> <td>75.4%</td> <td>44.1%</td> </tr> <tr> <td>4年</td> <td>70.9%</td> <td>63.2%</td> <td>55.6%</td> </tr> <tr> <td>5年</td> <td>85.7%</td> <td>66.7%</td> <td>79.0%</td> </tr> <tr> <td>6年</td> <td>67.6%</td> <td>39.6%</td> <td>80.2%</td> </tr> </tbody> </table> | | 人 | 本・図書室 | コンピュータ | 1年 | 64.0% | 77.5% | 34.2% | 2年 | 63.5% | 54.8% | 12.5% | 3年 | 70.3% | 75.4% | 44.1% | 4年 | 70.9% | 63.2% | 55.6% | 5年 | 85.7% | 66.7% | 79.0% | 6年 | 67.6% | 39.6% | 80.2% |
| | | 人 | 本・図書室 | コンピュータ | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| | 1年 | 64.0% | 77.5% | 34.2% | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| | 2年 | 63.5% | 54.8% | 12.5% | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| | 3年 | 70.3% | 75.4% | 44.1% | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| | 4年 | 70.9% | 63.2% | 55.6% | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 5年 | 85.7% | 66.7% | 79.0% | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 6年 | 67.6% | 39.6% | 80.2% | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 【本年度】 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| <table border="1"> <thead> <tr> <th></th> <th>人</th> <th>本・図書室</th> <th>コンピュータ</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>1年</td> <td>61.1%</td> <td>60.0%</td> <td>27.8%</td> </tr> <tr> <td>2年</td> <td>53.4%</td> <td>66.1%</td> <td>37.3%</td> </tr> <tr> <td>3年</td> <td>72.6%</td> <td>68.9%</td> <td>44.3%</td> </tr> <tr> <td>4年</td> <td>58.1%</td> <td>66.7%</td> <td>55.6%</td> </tr> <tr> <td>5年</td> <td>61.7%</td> <td>52.2%</td> <td>65.2%</td> </tr> <tr> <td>6年</td> <td>80.6%</td> <td>66.7%</td> <td>75.9%</td> </tr> </tbody> </table> | | 人 | 本・図書室 | コンピュータ | 1年 | 61.1% | 60.0% | 27.8% | 2年 | 53.4% | 66.1% | 37.3% | 3年 | 72.6% | 68.9% | 44.3% | 4年 | 58.1% | 66.7% | 55.6% | 5年 | 61.7% | 52.2% | 65.2% | 6年 | 80.6% | 66.7% | 75.9% | |
| | 人 | 本・図書室 | コンピュータ | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 1年 | 61.1% | 60.0% | 27.8% | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 2年 | 53.4% | 66.1% | 37.3% | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 3年 | 72.6% | 68.9% | 44.3% | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 4年 | 58.1% | 66.7% | 55.6% | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 5年 | 61.7% | 52.2% | 65.2% | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 6年 | 80.6% | 66.7% | 75.9% | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |

・改善策①について

教育課程を見直し、朝の打合せを削減したことにより、担任教師が子どもについて、あおいタイムに取り組ませている成果が児童95.3%といった高い評価につながっている。**子どもたちにとって「あおいタイム」が定着していることがうかがえる。また、昨年度67.9%だった教師の割合が、本年度95.3%となっているのも、「あおいタイム」に十分指導に当たることができていることが伺える。ただ、保護者は「定着が不十分」という認識の違いがまだある。やはり成果を児童自身が確認できるような取り組みが望まれる。保護者に見える形で成果を示す方を講じていかなければならない。**

・改善策②について

学力調査についての資料は、学校評議員会議要項 P 2, 3を参照。今後本校の実態を2学期中に報告していく。さらに、今回の分析により、課題として見えてきた内容を明確化し、あおいタイム中心に、向上を目指し取り組んでいく。

・改善策③④について

昨年度から情報教育では、コンピュータはその一つに過ぎず、本や聞き取りといった方法で情報を収集することも重要な要素であると考え引き続きアンケートを行っている。

まず、コンピュータを使っての学習の充実の面においては、目標値を設定したものの、教師の割合は達成できていない。通常活動として、コンピュータを活用した授業を行う難しさはあるが、様々な授業場面での取り組み方を今後も検討する必要がある。ただ、実際

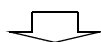
の授業においては，4年生，6年生の図画工作科の授業などでコンピュータの活用は充実している。調べ学習だけでなく，様々な活用方法を探っていく必要がある。

情報活用力の観点からは，高学年につれて，コンピュータを活用する率が上がっている。学年に沿った，情報教育のあり方をさらに探っていく。

Ⅲ 基本的な生活習慣の定着

【昨年度の改善策】

- ①学級や児童会活動で，基本的な生活習慣や規範意識について考える場をもち，その意味や必要性を子どもの中に育んでいく。
- ②附ぞくっ子タイムなどで，よりよい指導のあり方を互いに学び合う。
- ③帰りの会などで，一日の行動を振り返ったり，よい行いを賞賛したりする場をもち，一人一人がめあてをもって行動できるようにする。
- ④PTAと協力しながら，生活習慣や規範意識について啓発活動を行うことと，清掃活動に積極的に取り組む態度を培う。
- ⑤登下校指導を行い，あいさつの励行や登下校時におけるバスマナーの改善など，生活のなかでルールやマナーについて考える機会をとらえ，学級活動や通学班会の場で継続的に指導していく。



【本年度の取り組みと成果】

| 基本的な生活習慣の定着 | |
|-------------|--|
| 設問項目 | 設問 15 あいさつ，時間，ものを大切にするなどの基本的な生活習慣定着 教師： 昨年度 D 45.5% → 目標値 B 70% → 今年度 C 54.2% 保護者： 昨年度 B 73.2% → 目標値 A 80% → 今年度 B 76.2% 児童： 昨年度 A 92.8% → → 今年度 A 92.3% |
| 設問項目 | 設問 16 清掃指導 教師： 昨年度 A 81.8% → 目標値 A 85% → 今年度 A 83.3% 保護者： 昨年度 C 54.0% → 目標値 B 70% → 今年度 C 54.3% 児童： 昨年度 A 91.0% → → 今年度 A 92.2% |

・改善策①②③について

23年度後期児童総会ではバスマナーについて，24年度前期児童総会では，清掃活動について話し合う機会を設けた。子どもたち自身が問題意識をもち，生活の向上を図る姿をめざした取り組みを進めている。今回の評価で問題なのは，教師や保護者の評価に対して，児童の評価が高いという点ではないかと考える。**児童自身は「できている」と考えている姿が，大人から見ると不十分であるといった現れではないかと考える。こうした傾向は，数年来続いているが，設問15については，本年度，教師と児童の差が縮まっている。業務見直しから生まれた，日々のねばり強い指導の成果ではないだろうか。ただ，値とし**

ては、納得できるものではないので、今後、家庭や学校が連携し、子どもの主体性を大切にしつつ、節度を感じられる生活習慣の定着に努めたい。

附ぞくっ子タイムでは、担任の抱える問題を、共有化し個々の経験を通じた見方や感じ方をもとに指導の方向性を探っている。一人の教員に指導を任せるのではなく、学年や学校で指導に当たっている。今後もこうした取り組みを継続し、子どもにとってよりよい得指導を探っていく。

清掃活動では、ペア清掃を環境委員主催で行った。また、教師が子どもとともに清掃活動に取り組んでいる。このような取り組みが、教師と児童の意識につながっていると考える。

・改善策③について

各学級の取り組みは様々だが、目標を持って取り組んだ成果を学級全体で認め合う場を設定している。自分の活動が認められることで、次への目標設定につながっていると考えられる。今後もこうした取り組みを継続していく。

・改善策④⑤について

P T Aとの協力として、親子清掃、全保護者による登校指導、通学安全部の登下校指導などを実施している。附ぞくっ子タイムでも、生活のマナーやルールの向上を取り上げ、学級指導に生きるように努めている。また、通学班会では、通学安全部が作成した資料をもとに具体的な指導に当たるなど、登下校の安全とマナーについては繰り返し指導を行っている。今後は、バスマナーなどを、体験的な活動を通して学ぶ機会を検討し、さらに効果的な方法を模索していく。同時に保護者にも、学年便りや父母教師会からの通知文などで様子を知らせ、学校と家庭が一体となった具体的な指導を進めたい。

(2) 教師による自己評価

【Aのなかでも評価の割合が90%以上だった項目】 昨年度はなかった

| | | |
|------|--|--------|
| 設問1 | 附属小学校は、誇れる学校である。 | →100% |
| 設問2 | 附属小学校は、子どもの自主性や主体性を育む教育が実践できている。 | →91.7% |
| 設問10 | 子どもが英語に親しみ、楽しく学ぶことができる英語活動を行っている。 | →91.7% |
| 設問14 | 子どもの病気やけがなど、健康・安全面に配慮するとともに、常に細心の注意をはらっている。 | →91.7% |
| 設問19 | 附属小学校は、子どもの命や安全を守るため常に危機管理意識をもって指導している。 | →91.7% |
| 設問18 | ホームページ、学級・学年だよりなどで校内のできごとをよく保護者に知らせている。 | →87.7% |
| 設問20 | 附属小学校は、学校評価をもとにした改善点を点検しながら、よりよい学校運営をめざしている。 | →95.8% |

職員集団が学校に誇りを持ち教育活動に取り組んでいることがわかる。自校の教育目標を理解し、常に子どもの自主性や主体性、育む授業づくりに取り組んでいることがわかる。英語活動に対する割合が上がってきているのは、本年度研究会において外国語活動の授業を公

開したことで、担任自身も英語講師との連携を図った授業を進めてきた結果であると考えられる。健康・安全・安心な学校生活を強く意識しながら教育活動を進めていることも重要であり、今後も継続していきたい。また、学校評価をもとに、P D C Aサイクルを意識しながらよりよい学校づくりをめざす職員集団である。

設問18は、90%を超えてはいないものの、昨年まで、63.6%とCの評価だった、学校での出来事の公開（HP、学級・学年通信などの充実）について、特にHPの更新を、4月当初から意識し取り組んだ結果であるといえる。こうした取り組みが、本校への理解を深めるものにもつながるため、担当者のみならず、職員の自覚のもと継続的に取り組んでいきたい。

【C・Dと自己評価した項目】 昨年度はなかった

設問9 授業によって、子どもの問題解決力が育っている。

→C 66.7%

設問11 コンピュータを使った情報収集・活用に関する学習の仕方をていねいに教えている。

→D 33.3%

設問12 附属小学校での自校給食のおかげで、食事を作ってくれる人への感謝の気持ちが育っている。

→C 63.6%

設問15 あいさつ、時間を守る、物を大切にすることなどの基本的な生活習慣が身についている。

→C 54.2%

コンピュータの利用については、昨年度より割合は高くなっているものの、十分に活用できていない現状である。ただ、図画工作科や社会科での情報収集といった点で、学年によっては、コンピュータの活用率が上がっている。週毎のコンピュータ室利用時間を計画的に運用するとともに、環境面の整備という点からもプリンターなどハード面の改善を大学へ働きかけていくことが必要である。設問12については、新たに設定した評価項目である。前にも述べたが、自校給食を取っている本校の特性を考え、教育の場として、子どもたちへの期待感が、この数値に表れているのではないかと考える。作り手が見えるという視点から、積極的に給食室とのかかわりがもてる工夫を今後も検討していく必要がある。

（3）児童による授業評価・満足度調査

【Aのなかでも評価の割合が90%以上だった項目】 昨年度はなかった

設問1 附属小学校は、じまんでできる大好きな学校である。 →95.0%

設問2 自分で考え、進んで学習や仕事に取り組んでいる。 →90.7%

設問4 毎日の授業は楽しい。 →92.3%

設問7 朝のスピーチで、上手に話をしたり、友だちの話をよく聞くことができようになってきた。 →90.4%

設問8 あおいタイムや授業によって、読み・書き・計算など基本的なことが身につけてきた。 →95.3%

| | | |
|------|---|--------|
| 設問 9 | 授業によって、考える力や友だちとかかわって話し合う力が身についてきた。 | →90.6% |
| 設問10 | 英語活動の授業は楽しく、楽しみにしている。 | →91.5% |
| 設問12 | 作ってくれる人への感謝の気持ちをもって、おいしく給食を食べている。 | →94.6% |
| 設問15 | あいさつ、時間を守る、物を大切にすることができるようになった。 | →92.3% |
| 設問16 | そうじにまじめに取り組むことができる。 | →92.2% |
| 設問18 | 先生は、学年・学級だよりをよく出してくれる。 | →90.2% |
| 設問19 | 先生は、安心して学校へ通えるように守ってくれたり、災害時の安全や避難について教えてくれる。 | →91.4% |
| 設問20 | 先生たちは、アンケートなどをもとに、附属小学校をよい学校にしようとしてくれている。 | →91.7% |

多くの子どもたちが、附属小学校を誇りにするとともに、学校へ行くことや授業を楽しむことがわかる。授業改善を今後も推進していくとともに、設問7のような相互理解の場は、子どもたちのよりよい人間関係の形成、社会性の向上において重要である。今後も「聴いて応える姿勢」を大切に育てていきたい。設問15・16などの、基本的な生活習慣については、数値から保護者との意識のずれを感じるが、昨年度より評価が向上した項目がある。**朝の打合せの削減や業務改善（出張等の見直し）により、教師が子どもに寄り添いながら具体的に指導が行えている結果であろう。ただし、毎回のアンケートにおいて高い数値を表す設問1・5についても「あまりあてはまらない」「まったくあてはまらない」子どもは、それぞれ3.7%、7.7%とであった。一人一人を大切にす本校としても、こうした子どもたちの様子も把握し、それぞれに合った指導を進めたい。教師の設問5がBであった現状から、さらなる業務改善も含め、常に子どもを把握できる環境づくりを進めていく。**

【C・Dと評価した項目】

| | | |
|------|---|--------|
| 設問 6 | 附属小学校では、アイリスパートナーや五十嵐先生（スクールカウンセラー）に楽しかったことや、困ったことなどを話したりしたり相談したりできる。 | →53.1% |
|------|---|--------|

＜昨年度の改善対策と今年度の結果＞で記述済み。

（4）保護者による満足度調査

【Aのなかでも評価の割合が90%以上だった項目】 昨年度はなかった

| | | |
|-------------|-----------------------------------|--------|
| 設問 1 | 附属小学校は、誇れる学校である。 | →97.7% |
| 設問 2 | 附属小学校は、子どもの自主性や主体性を育む教育を実践している。 | →98.1% |
| 設問 3 | 教師は、授業や行事において、人とのかかわりを大切にして、子どもの指 | |

| | | |
|------|---------------------------------------|----------------|
| | 導に当たっている。 | →93.8% |
| 設問4 | 附属小学校は、楽しく学べる授業づくりの工夫がされている。 | →95.4% |
| 設問7 | 朝の会のスピーチによって、子どもたちに「聞く・話す」力が育っている。 | →91.5% |
| 設問10 | 子どもは英語活動に楽しく参加し、英語に親しんでいる。 | →91.5% |
| 設問14 | 学校は、子どもの安全や健康面に配慮し、適切に対応している。 | →91.4% |
| 設問17 | 子どもが安全に楽しく生活できるように、学校設備や教室環境が整えられている。 | →77.5% (83.4%) |

設問1・2・4については、昨年度と同様で高評価である。本校の自主性や主体性を重視した教育を理解し、誇りに感じていただいていることがわかる。また、本年度新たに設定した設問3やこれまでの設問7については、人とのかかわりを重要視する保護者の考えがわかる。今後も自信を持って進めていきたい。**子どもたちが仲間とかかわる姿を本校の特色として、学校公開などで生き生きとスピーチに参加する子どもたちの様子を見ていただけるような場をさらに設定したい。**

設問17については、計画的に学校設備や教室環境の整備を進めてきた。実際には、校舎自体は老朽化していることは事実だが、**昨年度より5%低くなっているのは、保護者のどのような意識によるものか把握したいところである。ただ、震災などを考え、校舎の耐震化などへの不安や日ごろの清掃活動状況から、安全に楽しく生活できる環境面に対する意識である考えることもできる。今後保護者の意識をとらえた後、学校として取り組めること、大学と連携して進めることを明確にし、方策を講じていきたい。**

【C・Dと評価した項目】

| | | |
|------|---------------------------------------|----------|
| 設問8 | あおいタイムや授業によって、子どもに基礎的な知識・技能の定着を図っている。 | →C 67.7% |
| 設問16 | 子どもは、そうじがよくできる。 | →C 54.3% |

＜昨年度の改善対策と今年度の結果＞で記述済み。

（5）成果と課題

ア 設問1，設問2，設問4については、教師・保護者・児童ともに90%をこえA評価となっている。**教師が、本校の教育方針，教育活動を自信をもって教師は進めており，保護者にもおおむね理解されていると考える。ただ，それぞれの項目に「あてはまらない」と考える子どもたちや保護者の意見を見逃すことなく，より充実した教育活動をめざす必要がある。さらに，設問4・9の教師評価が低いことは，教育活動をより充実させたい教師の強い願いの裏返しと考える。今後も学校評価をもとにしたPDCAサイクルを生かし，教育活動を進めたい。**

イ 「スクールカウンセラー」と「アイリスパートナー」について、児童の評価が昨年度よりも大きく低下している。アイリスパートナーが入っている学級が相談活動の対象ではなく、常に問題や不安を抱える子どもたちが、相談活動に掛かれる環境整備を行う必要があった。描かれる入り込んだ教師・保護者の評価は70%以上であったが、児童の評価が昨年度より向上しているものの、68.6%とやや低い評価であった。**スクールカウンセラーやアイリスパートナーのよりよい運用を大学と協議していくとともに、広報活動を重点的に進め、子どもたちにとって身近なものにしたい。**子どもたちの心の成長に向けた発信的な取り組みである。今後さらに運用方法を検討していきたい。

ウ 子ども情報の取得は、高学年に向けて、人から本、そしてコンピュータに移っていくことがデータから推測できる。ただ、1学期については、学年に応じた情報取得を考慮して学習指導と関連させて取り組めなかったことは事実である。**今後の授業のどの場面で、情報取得が必要か見通したり、コンピュータの活用においては、作業的な内容においても積極的に活用できるとよい。**

エ 自校給食である本校として、「食育」の視点で栄養士さんや調理員さんに直接かかわれる場面がある。子どもたちには、給食と作ってくれる人への感謝の気持ちを常に持っているが、現実には安易に給食を残したりする子どもの姿がある。そのような場面を見ることで、設問12の教師の評価が低くなっていると考えられる。**子どもたちが、自分たちの健康とつなげることができる実践的な食育の充実が望まれる。**

エ 昨年度の改善項目であった「**基礎的な知識や技能の習得**」「**基本的な生活習慣の定着**」「**清掃**」「**学校設備や教室環境の整備**」は、評価が向上しており、**成果が上がりつつある。**特に「基礎的な知識技能の習得」については、教師評価「B→A（本年度目標値達成）」からうかがえる。特に朝の時間の確保が有効的であった。**今後も学習指導の方法や一人一人に応じた教育活動を推進していくことで、成果を高めたい。**あいさつ・時間・物を大切にする（設問15）と清掃活動（設問16）について、教師や保護者の評価に比べ、児童の評価はいずれも高い（A）傾向にある。**これは、教師や保護者が子どもたちに求める姿と、子どもたちがめざす姿や自分を見つめる姿に差があるからと考える。意義や意味、めざす姿について子どもに気づかせていくような教師のはたらきかけをもとに、子どもと大人の願いを共有し、学校と家庭が一体となって継続的に指導する必要がある。**

課題と改善方策

【児童や保護者に応える支援体制の必要性】

一人一人の子どもが、楽しく安心して学校生活を過ごすことができることを私たちは望んでいる。また、学校は子どもを安心して通わせられるという保護者との信頼関係を築いていくことが大切である。子どもの悩みや保護者の悩みを積極的に聞き、解決のために全校体制で取り組んでいく必要がある。

本校の子どもたちは、明るく、活発に学校生活を送っているように見える。しかし、仲間と良好なかかわりができていないと考えている子どもも、少なからずいることが今回のアンケートからわかった。また、保護者においても、子どもに対する悩みや親子関係の悩み等を抱える方がいる。学校として、子どもたちや保護者が気軽に相談できる体制をつくっておくことが大切である。



① スクールカウンセラーやアイリスパートナーの運用の充実

| | |
|-------------|--|
| 目 標 値 | <p>設問 6 スクールカウンセラーやアイリスパートナーを活用し、より深く子どものことをとらえ、成長に役立てようとしている。</p> <p>教師 B 70.8% → A 85%</p> <p>保護者 B 84.5% →</p> <p>児童 C 53.1% → B 75%</p> |
| 改 善 策 | <ul style="list-style-type: none"> ・ 通信や掲示を活用し、アイリスパートナーの活動を全校に周知する。 ・ 学年主任、担任とスクールカウンセラー、アイリスパートナーとの連携を充実させるにあたり、報告用紙の活用や情報の電子化（セキュリティの保証を含め）による共有化した後、情報交換の場を明確に位置づける。 ・ 相談室の環境整備などを進め、効果的な運用を図る。 ・ 特別支援教育推進委員会を中心に、大学の関係機関や地域の診療・相談機関とも連携を模索し、より効果的な運用を協議・実践する。 |

【基礎的な知識や技能に支えられる問題解決的な学習】

子どもたちは問題を解決していく過程において、知識や技能を獲得していく。しかし、解決に向かうためには、基礎的な知識や技能の習得が必要となる。基礎的な知識や技能を身につけさせ、自信をもって、問題解決に向かわせていきたい。

【情報教育の推進の必要性】

情報収集はコンピュータの普及に伴い、とても容易になっている。また、情報は一方的に発信されているため、情報をどのように理解し、どのように利用していくかは、情報の受信者に任されている。情報を発信する場合には、情報モラルの点から、子どもたちが身につけるべき力が多くある。



| ②基礎的な知識や技能の習得と情報教育の取り組み改善 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|---------------------------|---|-------|---|-------|--|--|-----|---|-------|---|-------|----|---|-------|--|--|----|---|-------|---|-------|-----|---|-------|---|-------|
| 目 標 値 | <p>設問 8 基礎的な知識・技能の定着を図っている。</p> <table style="margin-left: 20px;"> <tr> <td>教師</td> <td>A</td> <td>87.5%</td> <td></td> <td></td> </tr> <tr> <td>保護者</td> <td>C</td> <td>67.7%</td> <td>→</td> <td>A 80%</td> </tr> <tr> <td>児童</td> <td>A</td> <td>95.3%</td> <td></td> <td></td> </tr> </table> <p>設問 11 コンピュータを使っての学習の充実</p> <table style="margin-left: 20px;"> <tr> <td>教師</td> <td>D</td> <td>33.3%</td> <td>→</td> <td>C 50%</td> </tr> <tr> <td>保護者</td> <td>B</td> <td>71.1%</td> <td>→</td> <td>A 80%</td> </tr> </table> | 教師 | A | 87.5% | | | 保護者 | C | 67.7% | → | A 80% | 児童 | A | 95.3% | | | 教師 | D | 33.3% | → | C 50% | 保護者 | B | 71.1% | → | A 80% |
| 教師 | A | 87.5% | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 保護者 | C | 67.7% | → | A 80% | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 児童 | A | 95.3% | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 教師 | D | 33.3% | → | C 50% | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 保護者 | B | 71.1% | → | A 80% | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 改 善 策 | <ul style="list-style-type: none"> ・あおいタイムの充実及び、授業でも基礎的な知識・技能の習得を図る時間を確保するとともに、その成果を児童自身や保護者が確認できる機会を設ける。 ・全国学力状況調査の結果を保護者会などで伝える。 ・自分の必要な情報を効率的に得たり、共有したり、発信したりする情報教育の考え方を教師が共通理解し、毎日の授業と結びつけながら指導にあたる。 ・授業参観等でコンピュータを活用する授業を公開する。 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |

【食を通して自らの健康を管理できる子ども】

子どもたちの給食の実態をみると、簡単に給食を残したり、偏った栄養摂取をしている子どもがいる。しかし、栄養士さんは、栄養バランスや歯の成長、地域食材の活用など、毎日の献立に意図をもって作ってくださっている。

常に温かい給食を取っている子どもたちは、給食を作ってくれている人への感謝の気持ちは忘れてはいない。しかし、給食を通して自らの健康を考えたり、食材と地域とのつながりを考えたりするなどの子どもの姿はあまりない。食育の生きた教材として自校給食の活用を検討していく必要がある。



③ 自校給食による食育の充実

| | |
|-----|--|
| 目標値 | 設問 12 附属小学校での自校給食のおかげで、食事を作ってくれる人への感謝の気持ちが育っている。 教師 C 66.7% → A 80% 保護者 A 80.7% 児童 A 81.3% |
| 改善策 | <ul style="list-style-type: none">・給食委員会の活動を充実させ、給食を通して自分たちの健康を考えることができる機会を設ける。・食育を学ぶ場を設定し、栄養士さんや調理員さんが参加できる授業を運営を検討する。・作業的内容や活動的な内容において積極的にコンピュータを活用する。 |

【清掃活動の充実を柱に子どもたちの生活を見つめさせる】

これまでも子どもたちの清掃活動への取り組みが問題になってきた。昨年より教師自ら、率先して清掃活動に取り組むことで、子どもたちが意欲的に清掃活動に取り組む姿を目にするようになってきた。子ども一人一人に目を向けると、短い清掃時間のなかでも、毎日目的をもって取り組む姿がある。本年度は、92%の子どもが清掃活動におおむねまじめに取り組んでいると評価している。しかし、保護者とのずれ感は大い。取り組む質の向上が求められている。

清掃活動の必要性を子どもたちに考えさせ、常に目的をもって取り組む子どもが育てば、清掃活動だけでなく、学校生活全般にも大きく影響してくると考える。



④子どもたちの基本的生活習慣を育む

| | |
|-------------|--|
| 目 標 値 | 設問 16 清掃指導 教師 A 83.3% → A 85% 保護者 C 54.3% → B 70% 児童 A 92.2% |
| 改 善 策 | <ul style="list-style-type: none"> ・学級や児童会活動を通して、清掃活動の意味や必要性を考えることができる子どもを育ていく。 ・附ぞくっ子タイムなどで、よりよい指導のあり方を互いに学び合う。 ・学級のための清掃活動への取り組みを見直し、常時ペア清掃活動など新たな取り組みを講じていく。 ・親子清掃活動など、PTAと協力しながら、清掃活動に積極的に取り組む態度を培う。 |

